

「やれやれ、うちにはまたずいぶん古いものが多いな……」

俺は電気も来ていない実家の地下室をライトを点けながら片付けつつ、埃まみれになってぼやいた。

まったく、教員の仕事はただでさえ忙しいのに。

たまの休める週末にまで、こんな作業をしなければならないとは。

まあ、休日を利用して久し振りに実家の方を片付けようと決めたのは自分なわけだから、文句も言えないが。

(未玖に手伝ってくれと言っとけばよかったか)

ひいき目なしでもかわいい妹の顔を思い浮かべながら、俺はそうひとりごちる。

こちらの家に住んでいた両親は早くして亡くなり、既に成人済みだった俺は、今は未玖の保護者として彼女と新居で二人暮らしだった。

家事などもしっかりとしてくれる、世話好きでよくできた妹だ。

頼めば、快く引き受けてはくれただろう。

とはいえ、年頃の女学生にこんな埃っぽい地下室の片付けを手伝わせるというのも気が引けるか。

「……まあ、仕方がないな」

溜息を吐きつつ、古い本棚の整理に取り掛かって。

そこでふと、並んでいるたくさんの研究ノートが存在に気が付いた。

「おや、これは……」

もしや、優秀な化学研究者だったという祖父のものだろうか。

俺がまだ幼い頃に亡くなったが、確かにこの地下室によくこもっていたような覚えがある。

試しに一冊手に取ってぱらぱらと軽くめくってみると、あちこちに複雑な化学式や計算式などがあって、確かにそうであるらしかった。

「……へえ、おじいちゃんの研究か。興味深いな……」

祖父はごく隠遁的で非社交的、世俗の名声にはまるで興味がなく個人の研究に没頭していたが、その才能は類稀なものだった……と、父から聞かされている。

かくいう俺自身も、学生時代は化学の研究にのめり込んでいて、高く評価されていたと自負している。

両親が早逝し、俺自身や未玖の生活のために働いて稼がねばならなかったのも、正

規の研究者にはならず教員として就職したわけだが、今でも化学の研究は趣味で続けているのだ。

時には企業などから商品開発の研究をアルバイトで請け負い、臨時収入を得たりもしていた。

「よし。こいつは持って帰って、後で読んでみるか！」

俺はちょっとした発見にうきうきして、本棚にあった研究ノートの類を鞆に詰め込むと、また片付けを再開した……。

・  
・  
・

「……こいつは……」

その日の夜、自室で持ち帰ったノートを一通り読み終えた俺は、そこに書かれていた内容に目を瞠った。

正直、いくら祖父が優秀な研究者だったにしても、所詮は数十年前の化学の話だと思っていた。

今現在の世ではとうに見向きもされないような内容だろうが、当時の研究者の足跡を辿ってみるというのも面白いかもしれないし。

あるいは何か一つくらいは未発見の事項とかがあるかも、という程度で、さして期待もせずに読み始めたのだが……。

「これは……とんでもない大発見じゃないか……！」

ちょっとした発見なんてものじゃない。

ノートは、未知の化学的発見の詰め込まれた宝物庫のようなものだった。

祖父は生前にこれほどの成果を挙げておきながら、それを一切公表もせずにいたというのか。

本当に世俗的な名誉や名声、富などには、まるきり興味がない人だったらしいな。

「……まあ。迂闊に公表できるような内容じゃないことも確かだが……」

たとえば、人間の各種欲求を刺激する未発見のフェロモンや、摂取した者を極めて被暗示性の高い催眠状態等に誘引する化学物質。

脳細胞の特定の神経回路を活性化・抑制することで、感覚や感情、記憶を操作する薬物の合成法など。

いずれも公表すれば、世紀の大発見としてノーベル賞ものの評価をされることは間違いない。

だが同時に、不用意に広めれば世界を今の姿から変えてしまいかねないほどの危険性を孕んでいることもまた、間違いない。

(……どうする?)

この中に収められた研究成果を論文の形にして公表するか、あるいは。

何らかのより慎重な形を考えて、後世に残す。

あるいは、封印したままにしておく。

もしくは、このノートに収められた研究成果を当面は公表せずに独占しておいて、俺個人のために密かに利用させてもらうとか……。

「……………」

いろいろな選択肢が頭に浮かんだが。

俺はそれらすべてを、ひとまずは脇に置いた。

(そんなことは、後から考えればいいさ)

それよりも今は、とにかく早くこのノートの研究成果を形にしてみたかった。

俺とて化学者のはしくれなのだ、こんなすごいものを見せられて、とにもかくにも作って試してみずにいられようか。

「……よしっ！」

一旦そう心を決めると、早くこのノートの研究成果を形にしてみたくて、いてもたってもいられなくなる。

もう夜も更けてきていたが明日に回そうという気にはなれず、俺は作業にかかることにした。

本格的な設備や材料を要する作業は明日以降、学校の化学実験室なりで行うとして、いまこの家にあるもので作れる範囲の品だけでも、ひとまず試作して形にしてみよう。

「そうだな……おお、こいつは……」

俺はノートをぺらぺらとめくって、ちょうど良さそうなものを見つけた。

必要な材料や機材から見て、これならここでも作れそうだ。

さっそく戸棚や何かを引っ掻き回して必要なものを揃えると、俺は嬉々として作業

に取り掛かった……。

・  
・  
・

「……お兄ちゃん。お兄ちゃんっ！」

まどろんでいた俺の耳に、妹の聞き心地の良い声が響く。

それに、扉を繰り返しノックするような音。

「ん……？」

ああ、もう朝か。

そう考えながら薄く目を開くと、部屋の入り口あたりで呆れたようにこちらを見ている未玖の顔が飛び込んできた。

ノック音は、俺の目を覚まさせるために、未玖が扉の内側を何度も叩いた音だったようだ。

「いつまで寝てるのよ。もう八時だよ、起きて」

「ああ……」

俺はのそりと身を起こす。

昨夜は興奮のあまり夜更かしして作業にかかりっきりだったから、いつもよりだいぶ遅くなった。

作業を大方終えたあたりでさすがに眠気が限界に達し、片付けもそこそこにベッドに横になってすぐに眠りに落ちたあたりまで、ぼんやりと覚えている。

幸い今日は日曜日なので、学校は休みだが。

「すまん、未玖。まだ家事の手伝いとかで、することあるかな？」

まだ少し寝ぼけ眼のまま、俺はベッドの上で身を起こした。

「もうっ。あのね、……」

口を少し曲げて何か言おうとした未玖は、しかし途中でふいに押し黙った。

上半身を起こしている俺を、じっと見つめているようだ。

「……ん？」

俺はどうしたのかと未玖の方を見て、そこで、何か彼女の様子がおかしいことに気

が付いた。

ついさっきまではまったくいつもどおりだったように思うのだが。

今は何か、瞳が潤んでいて。

頬が少し赤らみ、どことなく気怠そうな、熱っぽい感じのする表情を浮かべている。

「ど、どうした？」

「え……？」

「何か変な感じだぞ、お前、具合が悪いんじゃないか……」

俺が言うと、未玖は少し戸惑った様子だったが、はっきりと首を横に振った。

「私は……別に……どこも、悪くないよ……？」

「ならいいんだが……。顔が赤いし、なんかぼーっとしてるみたいなの……」

俺が言うと、未玖は少し顔をしかめて、俯き気味になる。

「……どこも悪くないはず、だけど……。お兄ちゃんを起こしにここへ来てから、なんか……身体が……」

なんだか煮え切らないような歯切れの悪い話し方に、俺は不安になった。

いつもの未玖はもっとハキハキとして、言いたいことは割とはっきり言う子なのだ。

何か問題があるならそう言うだろうし、何ともないなら平気だよと笑って出ていきそうなものだが。

そうせずに、いつまでも俺の部屋の入り口でもじもじしている。

「こっちへ来い。とりあえず、熱を見てやる」

俺がそう言って手招きすると、未玖は少しためらいながらも部屋に入ってきて、俺の傍までやってきた。

ベッドに座っている俺の高さに合わせて、少し屈みこむような姿勢で俺の目の前に立つ。

こっちが寝床から出て行ってやりたいのは山々だが、何分にも健全な成人の男には朝勃ちという生理現象があるものだから、そうもいかない。

「どれどれ……」

俺は手を伸ばして、未玖の額に触れた。

「あっ……」

未玖が、びくっと身体を震わせる。

「ん、少し熱っぽいかな？」

だがやはり具合が悪いというほどの熱ではなく、俺の勘違いだったかな、と思い直す。

「……違う……違うの……！」

何か切羽詰まったような声で言いながら、未玖は突然、俺に向かって倒れこむように抱き着いてきた。

「おわっ！？」

不意をつかれて、俺はそのまま仰向けにベッドに倒れ込む。

はずみで布団がずれて朝勃ちが露わになったが、そんなことを気にしている余裕はなかった。

「み、未玖……？」

俺は目を白黒させながら、自分に馬乗りになっている妹を見上げた。

「……ご、ごめんなさい……」

彼女ははっとしてあわてて俺の上から降りたが、それで様子が元に戻ったわけでもない。

相変わらず熱っぽく潤んだままの瞳が、俺を見つめている。

その頬は上気して赤くなり、どこか苦しそうだ。

「お、お前……本当に大丈夫か？」

そんな未玖の様子が心配になってそう声をかけた俺に、未玖は切羽詰まったように訴えてきた。

「大丈夫じゃない……私……なんだか……おかしいの……っ！」

「そ、それは……わかるけど……」

そう言った俺は、未玖の顔を、その潤んだ瞳を見て、はっと気が付いた。

これは、欲情した女の目だ。

(……まさか？)

俺は昨夜、夜通し作業して作った化学物質のことを思い出した。

女性の生殖本能を刺激する、未発見のフェロモン物質。

「さ、さっきから……体が……火照って……なんだか……」

「……………」

今も机の上に載っている、その精製した薬品が入った試験管の方に目をやる。

眠気が限界に達していたこともあって、かなり雑に、ありあわせの脱脂綿を口に詰

めて栓をしておいただけだ。

(密閉が不完全で、気化した成分が室内に漂っていた、か……?)

にしても、そんなごく少量の薬品を吸い込んだだけで、こんな風になるものだとはい。予想を遥かに超える効果だった。

未玖は戸口に立っていただけで影響を受け、その後に俺が気付かずに薬品が漂う室内に招き入れてしまったためにいま、このような状態に陥っているのだろう。

「う、うう……っ」

未玖は自分の体を抱き締めるようにして、震えながら呻いていたが。

「あああっ、もう……ダメえええっ！！」

じきに、耐えかねたように着ていたシャツを脱ぎ捨てて、上半身を露わにした。

もどかしげにブラジャーを外すと、大きな胸が弾むように飛び出し、俺の目の前で揺れる。

(い、いつのまに、こんなに大きく……)

そんな場合ではないのに、俺はごくりと唾を飲み込んだ。

「はあ、はあ……ああ……っ！！」

すぐそこに俺がいるにもかかわらず、未玖は自分の乳房を鷲掴みにし、激しく揉みしだく。

「ん、あ、はあっ……！」

その刺激に、未玖はびくびくっと身体を震わせた。

豊かなふくらみの先端は痛々しいほどに硬く尖りきって、その存在を主張している。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんっ……！」

未玖はうわごとのように俺の名を繰り返しながら、乳房を揉みしだき続ける。

唇の端から涎が垂れ、頬は上気して真っ赤に染まっていた。

俺に見ないでくれといたいのか、それとも見てくれといたいのか。

それとも、あるいは……。

「み、未玖……」

俺はごくくと唾を飲み込んでから、つい名前を呼んだ。

だが、それ以上何を言っていないかわからない。

(ど、どうする……?)

このままにしておくのもまずいし、かといって俺が何かしてやるべきなのか？